

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 野菜

発行日 平成27年 6月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 全 般 気象災害により被害を受けた作物は、草勢回復に努めましょう！
- ◆ 施設果菜類 換気の徹底、適切な肥培管理・水分管理と病害虫防除を！
- ◆ 露地きゅうり 生育に応じた整枝・摘葉管理と病害虫防除を！
- ◆ 雨よけほうれんそう 天候の変化に応じた適切な管理を！
- ◆ 露地葉菜類 病害虫防除の徹底と計画的な作業により良品出荷を！

1 生育概況

- (1) 一部地域では、6月中旬の降雹、強風、集中豪雨による作物被害が発生しています。
- (2) 施設果菜類は順次収穫が行われています。早熟作型のきゅうりは側枝の発生も順調で、例年より生育が進んでいます。雨よけトマトの収穫開始は例年並で生育は進んでいますが、着果負担により草勢が弱くなっている圃場が散見されます。ピーマンの生育は例年より進んでいますが、高温乾燥の影響により尻腐れ果が発生しています。病害虫の発生は、施設果菜類全般に灰色かび病が見え始めてきたほか、きゅうりではうどんこ病が広く発生しており、トマトでは青枯病が早くから見られています。また、アブラムシやアザミウマ類が例年より多い傾向です。
- (3) 露地果菜類の定植はほぼ終了しました。露地きゅうりや露地ピーマンは定植時期の乾燥により生育が停滞した圃場が多くみられましたが、一部を除き回復傾向にあります。
- (4) ほうれんそうの生育は概ね良好ですが、少雨や高温等の影響による生育遅れや生育ムラ、アブラムシ、コナダニ、タネバエやべと病、萎凋病、根腐病が一部の地域で見られます。
- (5) キャベツは乾燥の影響で立ち枯れ、生育不揃い等が一部の圃場で見られます。また、コナガ、モンシロチョウ等の食害も見られます。レタスは例年通り収穫は開始していますが、高温・乾燥の影響で生育が停滞しています。また、菌核病、灰色かび病、すそ枯病の発生が見られます。ねぎは降雨により生育は回復していますが、高温・乾燥による生育停滞や葉先枯れが発生している地域があります。また、アザミウマ類、ネギコガ、ハモグリバエ類やべと病、さび病、小菌核病が一部の地域で見られます。

2 技術対策

(1) 気象災害による事後対策

降雹、強風などで枝葉の折損や果実の損傷を受けた場合は、被害部分や被害果を速やかに除去し、液肥の葉面散布による草勢回復を図るとともに、殺菌剤の散布を行い病気の感染を予防します。

果菜類では、生長点が折れていても、状況によっては側枝の発生を促し栽培を継続することが可能ですが、それが難しい場合は、植え替えまたは他作物への切り替えを検討しましょう。

露地きゅうりの植え替えでは、育苗期間 15 日程度で 1.5 葉程度のセル成型苗を 7 月上旬頃までに直接定植することで、総収量で 5 t 程度の単収が期待できます。(平成 6 年度研究成果参照)

トマトの簡易雨よけ栽培では、被害を逃れたハウス栽培などの 2 葉程度のわき芽をセルトレイに挿芽育苗し定植することで、4 段階程度の果房からの収穫が見込めます。この際は通常より密植し収穫

果房数を確保します。(平成 12 年度研究成果参照)

集中豪雨などで圃場に滞水した場合は、速やかに排水を促し、通路の中耕等により根に酸素を供給するなどして草勢の回復を図ります。

局地的な豪雨に備え、明渠や暗渠の末端部分の詰まりなど排水対策の再確認を行います。

(2) ハウス果菜類の管理

ア 雨よけトマト

雨よけ栽培では収穫が始まり、草勢のバランスを崩しやすい時期に入ります。着果量や生長点付近の状態(生長点の大きさ、葉色、葉の巻き具合、茎の太さ)を確認しながら、適切な追肥や灌水により草勢を維持することがポイントになります。つる下げ作業も、一気に下げると極端に草勢を落としますので、こまめに行うようにしましょう。

例年、着果負担から草勢低下を引き起こしている事例が見受けられますので、適正に着果調整するとともに、天候と生育状況に応じた灌水施肥管理を行って下さい。

また、今後は降雨とともに灰色かび病や葉かび病の発生が多くなってきます。曇天時でもこまめに換気し、灌水は晴れた日の午前中に行うようにして、できるだけハウス内の湿度を高めないようにします。曇雨天時のわき芽かき作業は、病気を伝染させる場合もありますので、晴天時に作業するようにして下さい。薬剤防除は灰色かび病や葉かび病、アザミウマ類、アブラムシ類の防除を基本とした薬剤を選定し、適期防除に努めます。

今年は青枯病やかいよう病等がかなり早い時期から発生しています。発病株は速やかに抜き取り処分するとともに、ハサミや手袋などをこまめに消毒しながら作業し、圃場内での発生拡大を最小限に抑えましょう。

イ 雨よけピーマン

4本仕立ての整枝法は、「京ゆたか」では主枝第10分枝まで側枝3~4節摘心、主枝第11分枝以降は側枝2節摘心が基本です。「京鈴」「さらら」等の草勢が弱い品種は、下段側枝を2節程度で摘心し着果数を制限するとともに、灌水と追肥は少量多回数とし、草勢を低下させないように管理します。側枝の着果負担が多く草勢が低下する場合は、ふところ枝の摘除や側枝の着果数を減らすなどして、主枝の伸長を促進します。

また、圃場への浸水や多灌水により株元が過湿になると疫病が発生しやすく、乾燥してくると尻腐果が発生しやすくなります。pFメーターを目安とした水分管理を行うとともに、株元を乾かすような管理を心がけましょう。なお、pFメーターの指示値は2.0を目安とします。

一方、病害は灰色かび病が発生しやすくなりますので、ハウス内の湿度を高めないようにこまめに換気します。花かすを取り除くことも病害回避に有効です。害虫は気温の上昇とともにアザミウマ類やハダニ類が増加してきますので、花の内部と葉の裏側をよく観察し適切に防除します。

ウ 夏期高温期の昇温抑制対策

夏期高温に備え、遮光幕や塗布型遮光剤の利用を検討しましょう。資材の種類や使用濃度により効果や持続性に差が出ますので、使用方法を十分確認して利用してください。

また、ハウスの肩より上部での換気実施やツマ面の開放等により、できるだけハウス内に熱気がこもらないように工夫して下さい。

梅雨明け後は、品目により通路への散水や敷きわら等も地温やハウス内気温の昇温抑制に有効ですので、総合的対策を今から検討しておきましょう。

(3) 露地きゅうり

本格的な収穫を迎える時期となりましたが、今年は春先の高温乾燥の影響で、やや根張りの不十

分な圃場が散見されます。根が広く深く張れるような管理を特に心がけてください。

肥培管理については、収穫量に応じた追肥と灌水で草勢を確保します。特に乾燥気味の圃場では、灌水や敷きわらなどで土壌水分の保持を図ります。

1 本仕立ての場合の生育中期～盛期における基本的な整枝、摘葉管理は下表を参考に行いますが、品種や草勢により管理技術は多少異なりますので、あくまでも目安としてください。2 本仕立ての場合は、主枝 8～10 節から発生する側枝を 1 本伸ばします。それ以外の主枝 10 節までの側枝は 1 節摘心とし、主枝 11 節以降は 2 節摘心または半放任とします。

いずれの仕立て方法の場合でも、初期生育が劣り側枝の発生が鈍い場合は強剪定を避け、根の発生を促すように管理してください。

病害虫防除では、7 月はべと病や褐斑病、炭そ病等の斑点性病害の予防に重点をおきます。特に昨年後半に多発した炭そ病や褐斑病は、例年発生が見られる 7～10 日前からの予防散布が重要です。

なお、斑点性病害は薬剤散布による防除だけでなく、圃場内への蔓延を防ぐため疑わしい病斑が見られたら積極的に摘葉し、速やかに圃場外で処分しましょう。

キュウリホモプシス根腐病は、気づかないうちに根が感染している場合があります。生育中に萎れが発生していないかどうかを観察し、疑わしい症状が見られる場合は、最寄りのJAまたは普及センターへお問合せください。

雨の少ない地域では、アブラムシ類やハダニ類の発生も懸念されます。アブラムシ類は定植時に施用した粒剤の効果が切れてくる時期ですので、早めに薬剤散布を行うようにしてください。

表 1 生育中期～盛期の整枝、摘葉方法（例）

	子づる	孫づる	整枝のポイント	摘葉のポイント	その他
上段	1節摘心	半放任とし、混み合った部分のみ摘心する	1. 親づるは、生育が順調な場合は支柱の肩の部分で止めるが、上段の子づるの発生が悪い場合、発生が緩慢な品種、親づるの芯が小さい場合は遅く止める	1. 台木や穂木の子葉は摘除する 2. 病葉や老化葉を優先的に摘除するが、子づる、孫づるの生長点を覆っている葉を株当たり2～3枚/回を目安に除去する	放任枝とネット沿いに発生した子づるはテープナーでしっかり止めるが、それ以外の枝は誘引せずきゆうり全体に光が当たるよう樹を立体的に仕上げる
中段	2節摘心	1節摘心 ただし、草勢が弱い場合は早止めしない	2. 親づるの摘心後、草勢維持のため放任枝を2～3本残す。作業しやすいように腰～肩の範囲に子づるを張らせる。中段の子づるは収穫後1節残して切り戻す	3. 膝から下は摘葉し、通風を良くする 4. 親づるの摘葉は親づるの摘心後1ヶ月間を目安に終了する	
下段	1節摘心	1節摘心	3. 膝から下の子づる、孫づるは収穫後親節から切り戻す		

※下段：～10 節程度。中段：11～20 節程度。上段：21 節～

(4) 葉菜類の管理

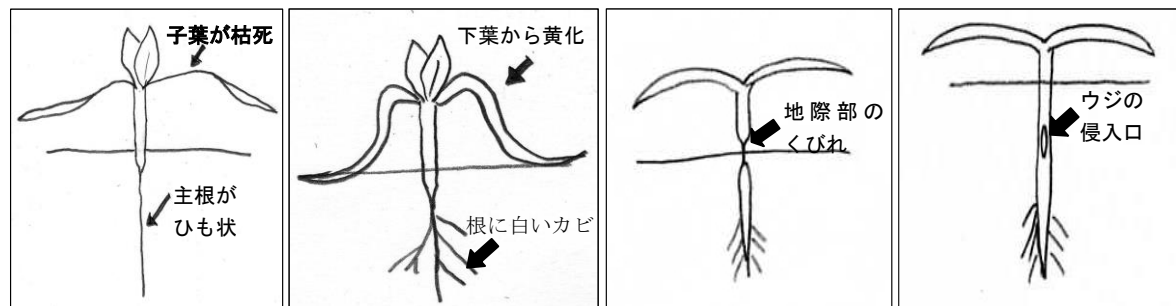
ア 雨よけほうれんそう

梅雨に入り、圃場内へ雨水が流入したりハウス内が過湿にならないように、圃場周囲の排水対策を確認しましょう。また、低温・日照不足から高温・多照へ天候が急変することが多くなります。換気や遮光をタイミングよく行って、萎れや徒長を防ぎましょう。

ほうれんそうの生育には厳しい時期になりますので、各産地で選定している夏播き用の品種を利用し、必要に応じて生育中の灌水を積極的に行いましょう。

この時期はべと病が発生しやすく、べと病にはレース（系統）が多くあるため抵抗性品種でも発病する場合があります。ハウス内が過湿にならないよう換気に努めるとともに、株間を広くして風通しを良くし、被害株は随時抜き取り処分します。例年発病が多い圃場では、予防散布を徹底しましょう。

地上部が萎れる原因は土壌病害や高温障害、タネバエ等です。判断は図1を参照して下さい。
 また、コナガニ類、アブラムシ類、アザミウマ類、タネバエ等の害虫の発生に注意しながら、
 粒剤等による予防防除や発生が見られた場合に効果のある薬剤の散布を行いましょう。



根腐病の症状

萎凋病の症状

高温障害の症状

タネバエによる被害

図1 ほうれんそう生育初期の萎れの原因の判断方法

イ キャベツ

コナガやヨトウガ等の害虫の発生が増える時期を迎えています。定植時の処理剤の利用を徹底するとともに、防除が遅れないように注意しましょう。コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を基本とします。なお、昨年岩手県内でジアミド抵抗性コナガの発生が確認されていますので、ジアミド系の薬剤は1作型1回の使用に留めるほか、年間の使用体系を考慮して使用して下さい。

また、収穫が終了した圃場で残渣をそのまま放置すると害虫の発生源になりますので、収穫後は早めに圃場を整理しましょう。

結球期に降雨が続くと株腐病の発生が多くなります。結球開始期から株元にも十分薬液がかかるように薬剤散布を行って下さい。圃場の排水対策についても確認しましょう。

ウ レタス

気温の上昇、降水量の増加にともない、すそ枯病、軟腐病、腐敗病等の腐敗性病害や灰色かび病の発生が多くなります。特に大雨が引き金になって、病害が多発する場合がありますので、気象情報等を参考にして、降雨の前後の防除に重点を置きましょう。また、これから定植する作型では、排水の良い圃場を選んで作付けするとともに、前作の残渣を圃場外に持ち出す、地温の低下に努める、適湿の時にマルチを張る等の対策を心がけましょう。

高温期の過剰施肥は変形球や腐敗の発生を招きやすいので、施肥量を控えめにするとともに、適期に収穫して品質の向上に努めましょう。

エ ねぎ

生育に応じた追肥、土寄せにより葉鞘の伸長を促しましょう。特に早出しを狙う作型では、無理に土寄せを行い葉鞘が細くならないように注意しましょう。今後、気温の上昇、降水量の増加が予想されますので、圃場の排水対策を確認しましょう。

また、大雨直後に土寄せを行うと軟腐病等病害発生の原因になりますので、圃場の水分が低くなってから行う等作業のタイミングを計り、状況に応じて効果のある薬剤で防除しましょう。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

次回の発行予定日は7月30日(木)です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しています。発行年月日を確認のうえ、最新の情報をご利用ください。

中央農業改良普及センター・地域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。